



高速道路や新幹線、飛行機と、短時間で遠くに行く手段には事欠かない現代だが、旧街道に近い道筋でのんびりドライブすると思わぬ発見もあり、味わいもある。機会があればぜひ振袖地藏に手を合わせていただきたい、義峰に代わって…。

過日、東京へのドライブの帰り道に福島市の飯坂温泉に立ち寄り、そこからカーナビ任せで秋田まで最短距離で帰ってこようとしたら、国道4号の国見町から左に折れるようにとの指示で、ほどなくして小坂峠というところでもない山道にさしかかった。山中に集落があるため冬でも通行止めにしていないようだが、特段に用がなければ通行は遠慮したくなるようなあい路であった。

あとから分かったことだが、この小坂峠も羽州街道の一部で、藩政時代は諸大名の参勤交代にも使われた幹線道路路であったらしいのだ。あらためて往時の往来の大変さが偲ばれたことだった。

小坂峠を下って七ヶ宿町に出ると滑津なめつという集落がある。ここもかつては宿場町であった。その集落のはずれに、身の丈2mほどの「振袖地藏」が立っている。名前の通り、衣の袖が振り袖のように見え、女性的な穏やかな顔立ちのお地藏さんだ。

説明書きによれば、建立のいわれは以下のようなものだ。むかし秋田の殿様が参勤交代でこの地にさしかかったとき、一人の美しい娘を見初めた。殿様は娘のことが忘れられず、帰国の際に侍女に召そうとしたがそのときには娘はすでに病気で亡くなっていた。殿様は深く悲しみ、娘の供養のためにこの地藏を建てた…と。

これはあくまで言い伝えてあり、史実としての正確な記録が残っているものではないが、地藏の建立がいわれ通り享保20年（1735）で間違いないとすれば、わが久保田藩は五代藩主佐竹義峰の時代である。義峰は享保15年3月11日に参勤交代のために秋田を出発し、その数日後にはこの地を通りかかっている。当時の義峰は40歳前後である。時間軸で考えるなら、地藏を建てたのは義峰と考えるのが妥当だろう。

殿様の愛した村娘、どれほどの器量の人であったのだろうか。

殿様の愛した村娘